

Marine Turtler

マリントートル

特定非営利活動法人

日本ウミガメ協議会 機関誌

マリントートル列伝 沖縄編その2

亀崎 直樹・・・・・・・・・・1

「神は我々を見放した」映画八甲田山のワンシーンだが、

「カメは我々を見放した」であった。

小林 茂夫・・・・・・・・・・4

活動報告・・・・・・・・・・5

黒島	八重山海中公園研究所	島	達也
高知県	室戸市	若月	元樹
兵庫県	明石市	波多野	真樹
兵庫県	淡路島	大鹿	達弥
メキシコ		水野	康次郎

「アカウミガメ」冊子初版発行時の思い出

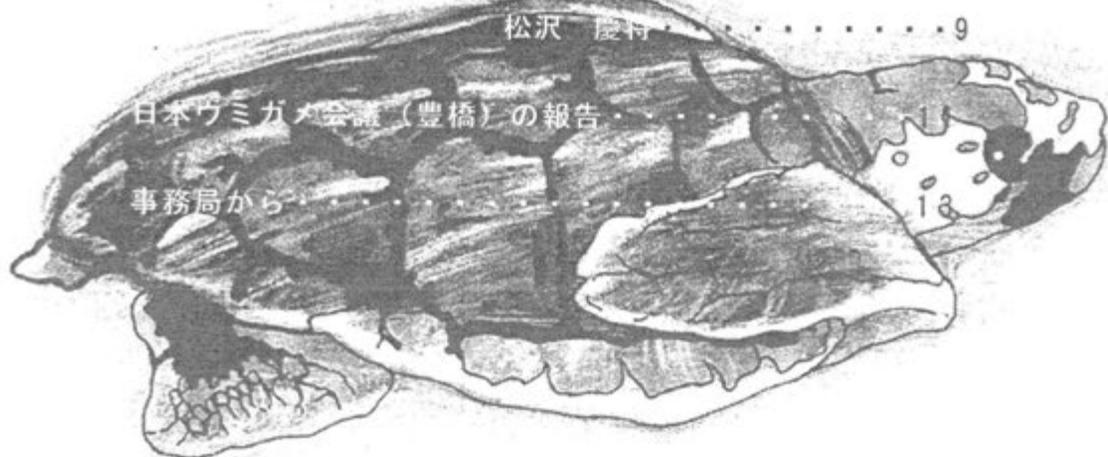
照本 善造・・・・・・・・・・7

ウミガメ基礎講座4「凍えるウミガメ」

松沢 慶特・・・・・・・・・・9

日本ウミガメ会議（豊橋）の報告

事務局から



マリントラ列伝

沖縄編

その2

亀崎 直樹

私が本格的にウミガメを始めたのは、日本の最南端、八重山諸島の黒島にある八重山海中公園研究所の研究員をしている頃でした。1983年から87年にかけてのことです。この研究所は1973年に出来たのですが、設立した当時の研究員はすでに黒島の西にある通称西の浜でウミガメが産卵することを確認し、その上陸・産卵回数を数えてました。それを始めたのは現在串本海中公園にいる御前洋さんでした。そして、その時、我が国では初めてタイマイが産卵することを確認したのも御前さんでした。そして、幸運だったのは、その後黒島でウミガメ調査を引き継いだのが、現在、当協議会の理事をしていただいている宮脇逸郎さんだったのです。通常、このようなモニタリングの仕事というのは、それに興味を持っている人間が去ると潰えてしまうのですが、宮脇さんの調査が契機となり、その後も亀崎を含め、野村恵一、平手康市、岩瀬文人、柏原正尚、森美枝、佐藤文宏、重井明男、浅井康行、黒柳賢治、小寺昌彦、近藤鉄也、島達也の各氏によって引き継がれ現在に至っているのです。

ここで、現在でも自信を持ってマリントラターとして紹介できる方はたくさんおられますが、今回は平手康市さんの紹介をさせていただきたいと思います。





石垣の飲み屋で踊る平手さん

平手さんは私が黒島の海中公園研究所の研究者をしていたころ、毎年、大学が休みになるとひょっこり現れる背の高いヒョロヒョロした学生でした。その頃、研究所には全国各地から学生が集まり、それなりのテーマを持って、毎日、海に出ていました。その中でも平手さんは活発に海で潜水、サンゴ礁の生き物に対する造詣を深めていったのでした。ところが、彼には欠点がありました。字が下手だったのです。彼のレポートを読むのは大変でした。「ろ」と「る」と「3」と「2」の文字の区別がつかないのです。私は、彼のレポートを読みながら、「ろ」と「る」と「3」と「2」の文字に出くわす度に、彼を呼びつけ、「これは何と読むのや？」と尋ねるのでした。その時、関係者が確信を持っていたのは、彼はこの下手な文字のために、ろくな就職は出来ないに違いないであろう、ということでした。

彼はそれでも黒島の研究所が好きなので、夏休み、冬休み、春休み

と、大学が休みになると、来るなどいうのに必ず黒島にやってきたのでした。そして、来る度に、「講義が始まったから、もう大阪へもどれば？」という我々の忠告を無視し、研究所に居続けたのです（一部には研究員が引きとめたという噂もあります）。

彼と私の関係を良く現す出来事の一つ紹介しておきましょう。夏のある夜、平手さん達数人の学生と一緒に、ナイトダイビングに出かけました。アナドマリという海岸から、歩いてバシャバシャと海に入っていたら、目の前の海面を2枚の鰭が横切っていたのです。第一背鰭と第二背鰭の間隔からすると大きいサメに違いありません。ちょっと怖かったのですが、「大丈夫やろ」ということで、そのまま海に入ったのでした。色々と夜の生き物を観察をして泳いでいたのですが、その時、目の前をアバサ（ハリセンボン、美味しい）がフラフラと泳いでいるのです。私は毎日ろくな物を食べていない学生のことを思い、たまにはいいやろ、と持っていたナイフでアバサを一突きにしたのでした。アバサは血を出して膨らみました。私はそのアバサの尻尾を持って、平手さんに持つようお願いしたのでした。

ところが平手さんは、何かいつ



もとは違う様子で慌てふためいてそれを受け取り、持っていたビニール袋に入れたのでした。いったい何をしているのか解からなかったのですが、アバサの針はビニール袋を突き刺し、中から血が出ていました。すると、平手さん達学生は、ラグビーをしているようにアバサを互いにパスし始めたのでした。私には何か解からなかったのですが、彼らの話をきくと、血の匂いでサメが寄ってくるのではと恐れ、血のしたたるアバサの入ったビニール袋を人に押し付けあっていただのことでした（一部には、それは亀崎の確信犯であるとする説もあります）。でも、サメの恐怖と闘ってアバサを守った平手さんは流石といわざるを得ません。

そんな平手さんでしたが、大学を卒業後、就職もせず石垣の水産試験所のバイトや黒島の研究所のバイトをしていました。良識ある我々は、「こりゃ、奈落の底に落ちていくパターンやな」と、彼の将来をほとんど諦めていたのですが、何と沖縄県の公務員試験に通ったのです。その頃、会社を退職して無職の状態だった亀崎と立派な公務員である平手さんの力関係は、見事に逆転したのでした。立場や環境は人を造るのは確かで、平手さんはどんどんと公務員としての頭角を現し、実力を得てい

きました。そんな時、次のようなエピソードがあります。

私が日本ウミガメ協議会の会長を勤めるようになってすぐの頃、契約書を袋綴じにするようある行政から指導を受けました。私は、封筒に入れて封をして提出したのですが、すぐにまた「袋綴じにせよ」と冷たく突っ返されてくるのです。私は知り合いに電話をして「袋綴じってどうするの？」と尋ねまわりましたが、そもそも私の友人にはそのような風習に精通している者はいなく、らちがあかなかたのです。そこで、平手さんに電話したのでした。平手さんは実に嬉しそうに「えええ？、亀崎さん、そんなことも知らないんですか？まったく・・・、もう・・・。契約書のページが離れないように、背表紙付けて印鑑で封をするんですよ。はははは・・・。」

こんな平手さんも、その後、琉球大学大学院に社会人入学され、沖縄本島の宜野座の定置網で捕れるアオウミガメを題材に修士号をとられるなど、まさにタートル的な活躍をされているわけです。ただ、一つ言えることは、彼にとってこの世にワープロが誕生したことが、大きな人生の分岐点になったことは間違いありません。



「神は我々を見放した」映画八甲田山のワンシーンだが、
「カメは我々を見放した」であった。

小林茂夫 会員(沖縄県 糸満市)

連休明けの5月9日、散歩の途中で足跡を発見した女房が、「キャタピラ、キャタピラ」と嬉しそうに、報告に戻ってきた。「去年はどこで浮気してたんだ。でもよくぞ戻ってきてくれた」と、つぶやきながら、掘り起こした卵に触れる。この日から、楽しくもあり眠くもある、カメシーズンが幕開けした。今期はタフガイ?の若月元樹君が、四国の漁師に弟子入り?したため、オジーの私が頑張るハメになってしまったが、8月末、最後のふ化率調査を終え、幕を閉じた。

今期は、2匹の個体が9回上陸し、うち7回産卵をした。産卵の最終日は7月5日。早いと思われる方もいると思うが、大度浜海岸は夏休みに入ったら、夜遅くまで浜はキャンパーたちの嬌声や花火で賑わう。カメさんにとっては、とんだ災難だ。でも沖縄では【海浜を自由に使用する条例】で、他人に危害や迷惑をかけなければ、何をしても良いという、ウソみたいな県条例がある。今、糸満市では「ちょっと待った」と、までは行かないが【海亀保護条例】を施行し、カメ権?を守ろうという動きがある。自分も体力の衰えを口でカバーし、カメ権を勝ち取った暁には、ご褒美に竜宮につれて行ってもらうとしよう。

小林茂夫さん

1941年生まれ。持病の糖尿病治療に専念するため、退職を機に東京から沖縄へ移住。近くの大度海岸を散歩中にウミガメの死体を発見。以来、マリントラクターとなる。現在は妻の操(みさお)さんとともに浜のゴミを拾いながら産卵地を見守る毎日である。
(紹介文：若月元樹)



各地での活動報告

黒島 八重山海中公園研究所

研究員・八重山研究所所長代理 島達也



八重山海中公園研究所の内観

沖縄県八重山諸島の黒島は人口200人ばかりに牛3000頭という周囲12kmほどの小さな島です。八重山海中公園研究所は、1972年この地に開所して以来30年にわたって、主に石西礁湖のサンゴ礁とウミガメ類についての調査・研究活動を行ってきました。今年27年目を迎えた「黒島マリンスクール」など自然教育・普及の分野でも先駆的に活動してきました。30年に及ぶ(財)海中公園センターの活動は、2002年春その役割を終えたとされ解散し、当研究所もそれに伴って閉鎖の危機にありましたが、日本ウミガメ協議会が施設の運営を引き継ぐことになりました。私が当研究所を訪れたのは、1985年の年の瀬でした。何気なく研究所の廊下で掲示物を読んでいると、「どこから来たんやー」と声を掛けられました。声の主は、当時研究員であった亀崎さんであり、自分が鹿大生であることを告げると、「おっ、おもしろやー」「まあ、泊まっていけー」と言われるまま現在に至っています。黒島ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種が産卵しますし、子ガメも飼育しています。皆さん是非お訪ねください。

沖縄県八重山諸島の黒島は人口200人ばかりに牛3000頭という周囲12kmほどの小さな島です。八重山海中公園研究所

高知県 室戸市

研究員 若月元樹・笠井優介

高知県では室戸岬近くの定置網で網に入ってしまいうみガメの調査を行なっています。この調査は室戸市高岡で2001年6月ごろから始まり、今年の5月からは現地に常駐し、朝と昼に行なわれる漁に毎日同行しております。これまであまり知られていなかった定置網混獲の実態、回遊個体の体長測定や標識装着放流等はウミガメの生態を解明する上で重要なデータとなり、その成果も蓄積されつつあります。また残念ながら網の中で溺死してしまうウミガメもいます。通常のストランディングはガスが充満し、内臓も腐っている場合がありますが、ここでは数時間前に溺死した新鮮な臓器を目の当たりにすることが出来ます。これらの死を無駄にしない為にも新鮮な臓器の保存や分析等、解剖調査にも力を注ぐ方針です。本調査を実行するに当たって協議会がこれまで注いできた費用や時間などの努力量も相当なものです。本調査を受け入れた室戸市高岡大敷組合という「現場」の人々の理解を得られたということは画期的なことであり、その協力に報える成果を挙げられるよう頑張っていきたいと考えております。また協議会の調査を応援してくれている漁師のひとり、山下傑(やましたすける)氏を協力調査員に任命させて頂き、調査・研究のお手伝いをして頂いております。室戸では漁師さんの他にも海辺で暮らしてきた人々からもウミガメや海の話などを伺う機会にも恵まれております。その言葉からは自然に対する謙虚な姿勢とその暮らしから身に付けられた豊かな感性があふれでております。室戸での調査はまだ始まったばかりで、蓄積も浅いですが今年のウミガメ会議では山下傑、山下昌司、大鹿達弥をはじめ、室戸で得られた成果がいくつか報告されました。今後の更なる成果をご期待下さい。



混獲されたウミガメを調査している風景。とても重いので2人がかりでやっと持ち上げられます。



兵庫県明石市

研究員 波多野真樹

アカウミガメが帰る砂浜づくり

明石の海岸では、国土交通省(旧建設省)が人工的に砂浜をつくる事業(=養浜事業)を実施しています。この事業に着手して4年目の昭和61年夏、なんとアカウミガメの産卵が確認され、それ以降はほぼ毎年のように確認されました。しかし平成12年を最後に上陸・産卵は確認されず、そんな状況を心配した地元の皆さんから「何とかできないのか?」との声がありました。そこで日本ウミガメ協議会の協力を仰ぎ、昨夏から約400mの砂浜を「アカウミガメ・サンクチュアリ」とし、アカウミガメが安心して帰れる砂浜づくりを進めています。例えば水上バイクや花火を控えるよう注意看板を設置したり、啓発チラシを小学校に配付したり、海岸工事を夕方4時に終わらせたりと、残念ながら昨夏も今夏も上陸・産卵は確認されませんでした。活動自体は地元の皆さんにとっても喜ばれました。来夏こそはアカウミガメが帰ることを期待し、もっと頑張りたいと思います!



研究会の様子

メキシコ

調査員 水野康次郎

メキシコとの共同調査

7月21日から45日間、カリフォルニア半島でメキシコの研究員(昨年のウミガメ会議招待研究者のアントニオなど)と合同調査を行ってきました。主な調査内容はウミガメ



漂着したウミガメが集められている場所。

の捕獲、ウミガメの現状把握、研究者との顔合わせなどです。捕獲調査は網による捕獲と素手による捕獲がありました。そのうち素手による捕獲はとても興味深いもので、水面休息をしているウミガメを船で探し、見つけたところを近づいて船首から飛び込み素手で捕まえるというものです。捕まえたウミガメは計測や採血、衛星発信機装着等おこなっていました。また、メキシコの現状をみていくとアカウミガメは大変な状態にあるようです。カリフォルニア半島の南西に南北60km以上に伸びた砂の島があり、そこで行われているストランディング調査も同行しましたが、毎日数頭のアカウミガメが漂着しています。この周辺海域では、刺し網漁がおこなわれており、多くのウミガメがそれらの網にかかり、溺死し捨てられて漂着しているようです。今回の調査ではこういった重要なことが分かり、今後これらを踏まえたうえでメキシコとの調査につなげていければと思います。

兵庫県 淡路島

研究員 大東達弥

瀬戸内海東部に位置する淡路島では、これまでウミガメに関する調査などは行なわれていませんでした。今までも上陸・産卵などの報告はありましたが、それは近隣住民の方たちによる偶発的な発見で、新聞記事などで記録がなされているものに過ぎませんでした。昨年、淡路島東南側の由良の海岸で上陸発見の通報を受け、協議会のメンバーが調査を行ないました。昨年は淡路島全体で、この由良の産卵1回だけの確認でしたが、今年は「淡路島でも定期的に産卵されているのでは?」と意識を高めて、情報の提供や調査範囲を広げていました。そうしていると、今年是由良の沖合の成ヶ島という無人島で上陸痕を発見しました。そこから調査を進めると、上陸5回・産卵2回を確認することができました。ふ化までの間に台風が通過したりと心配されましたが、9月上旬にふ化が確認されました。ふ化率53%と84%でした。淡路島は面積が広く、他にも上陸・産卵されている浜があると考えられます。これからはさらに調査を進めていくとともに、淡路島在住の方で調査を協力していただけるメンバーと出会うことを願っています。



台風10号後の産卵巣の再調査。



「アカウミガメ」冊子初版発行時の思い出

蒼永印刷株式会社 照本善造

徳島県日和佐大浜海岸における生態研究の記録「アカウミガメ」著、近藤康男先生(B5伴、96ページ)初版発刊(非売品)500冊。1968.7.20完成。

この度、日本ウミガメ協議会事務局発行の「第4号マリンタートラー」に掲載記事の依頼が、協議会亀崎会長の要望がございました。

今、思えば大変古い話ではありますが、私が1967年に印刷業を創業させて頂きました期に、同志の間で「ウミガメ」に関する冊子の出版をしようと話が前向きになって参りました。私が、同志同僚のなかで担当させて頂き、冊子の完成までの話を十分な記憶ではありませんが、当時、近藤康男先生の出版までの非常にご苦労されたことを思い出して綴ってみました。

***原稿づくりのご苦労。**

当時、先生も人生で一番脂に乗っている40歳を迎えた頃でした。私達同志の意思が伝わって、原稿づくりに「挑戦」することを考えて頂きましたが、口で言うほど簡単ではなかったと思っております。

先ず、参考にしたい書籍類が一切ありませんでしたし、当時の変色した写真の一枚一枚が大変貴重でもありました。幸いにも、先生はドイツ製のカメラ(6×6cm、6枚撮り)を所有されていたので、多少の写真は揃っていたと考えますが、近年と違ってフィルムも非常に高かった時代でした。安い月給でしかも自費で買っておられましたから、そんなに多くの資料に使う写真はなかったと思います。写真を使いたいが見える写真がなく、何日も何

日もかけて記憶をもとにイラストを創っておられましたが、また、これが非常に上手で写真以上の迫力のある作品もありました。「発刊を祝して」を頂いた、当時の徳島大学理学博士岡田先生との、パイプも敷かれ手いたので、再三にわたり足を運ばれておりました。今の時代でこそ、出版することは容易ではありますが、戦後10数年で世界で初めて「アカウミガメ」の専門書が原稿が近藤康男先生によって1年半後完成を見たのであります。そして、半年後の完成に、私が担当する時がやって参りました。



アカウミガメの発生のページより、孵化日数や地温などの実験がされている。

***製作準備に取りかかる**

製作準備にとりかかり、先生も、この冊子は絶対に出版させるという意気込みでした。今、思うと気合充分でありました。それからは、数10回におよぶ徳島、大阪間を内容のチェックなどに通って頂きました。合間をみては会社の仕事も手伝っていただきました。特に、強調された内容には、同志がつくっ



た資料も多いということで、レイアウト全般についても、費用を最小限で仕上げる自信もありました。後一つ、先生が何冊必要とされているかが、費用の点で正直云って大変心配をしておりました。日々追う毎に、だんだんと製作費用もかかってくる時期に、先生を初め同志からの援助金も入り「ホウー」と、助かったことを強く印象に残っております。最終的には、500冊作らせて頂きました。この時点で、形状、ページ数、使用する用紙等がはっきりとしてきてからは、毎日のように原価計算を欠かさなかったし、同業仲間の方々に相当な無理難題を、お願いしたことを強く記憶いたしております。

特に、現在90歳(私と二周り違い)で元気にされております、西畑製本所の親父さんには、特別に感謝しております。

親父さんには、後に民謡教室でまた、奥様とは藤本流三味線で色々のご指導を賜っております。

＊ 完成を祝う

「アカウミガメ」冊子完成500冊、内300冊を日和佐へ、同中学校へ100冊、贈呈いたしました。また、近藤先生の手許でも1988年「海亀国際会議」後には、在庫なしと聞いておりました。

あの完成祝賀会(同志)での、先生の感激と興奮ぶりを今尚はっきりと思い出します。大変恐縮ではありますが、十分な製作費用もなかったことは事実でございます。しかし後に、ウミガメ協議会

亀崎会長が直接に、近藤康男さんの著「アカウミガメ」は、当時としては世界的に大変な文献だとの評価を頂き、また、会長がうなるほどの内容でもあることも断言して頂きました。私が、この印刷

業界で育ったからあの時期に完成を視たかも知れないと感じ、大変な感動を憶えたことがありました。

協議会においても、非常に若い優秀な方々が地味な活動をされていることに頭が下がる思いと、研究の歴史が短く参考書も十分に整っていない現状ですが、疑問な点は協議会へご相談を頂くのも方法かと思う。先般も、大学を終了されてまもない若い女性が、専門書(12,000円)を購入されていましたが、近藤先生に次ぐ亀崎会長そして若い優秀な人材が各地でどんどん増えていっていることに、非常に喜びを感じております。



アカウミガメ

徳島県日和佐海岸における生態研究の記録

A5判 96ページ

昭和43年7月20日初版発行

平成12年9月30日再版発行

執筆者 近藤康男

編集 海亀研究同人会

発行者(初版) 藤中功 (再版) 近藤康男

印刷 蒼永印刷株式会社



ウミガメ基礎講座 4

「凍えるウミガメ」

松沢 慶将

先日、とあるテレビ番組の制作部から、「浦島太郎が助けた亀がメスであったと生物学的見地から断定して欲しい」との依頼があり、間に合わせで以下の説明を提示しました。砂浜にウミガメが生きて上陸するのは、(1)メスの産卵、(2)アオウミガメのバスキング(甲羅干し)と、(3)寒さで仮死状態になった個体の漂着しかなく、他の条件から(2)と(3)は適さないで(1)、すなわち「メス」であると。これに対して放送後、「メスの産卵や、ハワイとガラパゴスでのアオウミガメのバスキング(日光浴)は知っていたが、三番目の例は知らなかった。」とか、「寒さで仮死状態になったカメではダメなのか?」といった声が寄せられました。そこで、今回は寒さに凍えるウミガメについて紹介します。

あらゆる動物は、限られた範囲の温度の中でしか暮らすことができません。我々人間を含む哺乳類と鳥類は、少々の寒さなら堪えられますが、それは、体内で多くの熱を作ったり、体表近くの体毛や羽毛を身につけ血流を制御するなどしているからです。爬虫類にはそのような機能が発達していないために、寒くなる地域に暮らす動物の多くは冬眠という方法で寒さに対応しています。ウミガメの場合、冬場に浅い海底で泥に埋もれてじっとしている個体が見つかることがあり、これを「冬眠」だとする意見もありますが、基本的には冬眠はしません。体が大きいことで容易に体温を維持しているオサガメは別として、寒さに対しては、より温かい場所へ移動するという方法で対応しているようです。ところが、入り組んだ水域や沿岸部では状況が異なってきます。急に寒波が訪れた際に、ウミガメはそこから逃げ出すことができません。まず、水温が15度を下回るとウミガメの活動性は急激に低下します。次に、10度くらいになると浮力調節ができなくなり、海面に浮き上がっていわゆ



る仮死状態となります。そして、種やサイズ、時間にもよりますが、5、6度にまで下がると死に至ります。

このような現象は、アカウミガメ、アオウミガメ、ケンプヒメウミガメ、ヒメウミガメで知られています。別に珍しいことではなく、冬の日本海では、特に季節風の強く吹いた後に凍えたり既に死んだウミガメが海岸に漂着するという報告が数多くあります。米国東海岸では組織的に調査・救助が行われていて、例えばマサチューセッツ州のある海岸ではボランティア達が満潮の度にパトロールして、277個体も見つけた年もあります。頻りにパトロールするのは、一刻も早く手当をしないと蘇生できないからです。救助した個体の処置法は症状にもよっても違いますが、基本的には乾燥を防ぎながら体をゆっくりと温めていきます。塩分排出をしている涙の塩類腺が著しく機能低下している場合が多いので、機能が回復して血液成分が正常値に戻るまでは淡水で飼育することもあります。完全に回復しても、すぐに放流することはありません。冷たい海に戻してしまえば、再び凍えてしまう可能性が高いからです。

このような現状からすれば、浦島太郎の物語も、産卵後に海に帰りそびれて子供達に囲まれていたウミガメを若者が助けたという設定よりも、寒さに凍えて砂浜に打ち上げられたウミガメを若者が介抱したという方が話としてしっくりするようになると思います。しかし、敢えて「数日後に太郎を向かえに来た」ことにこだわるならば、凍えたカメでは無理なわけです。まあ、所詮はお伽話ですから、これをいちいち真面目に論じること自体ナンセンスですし、それを真に受けて「へえ～」と言ったり、言わせたりすることもばかばかしいことですが。



京都府丹後半島の伊根町本庄にある浦嶋神社(宇良神社)

浦島伝説は全国で100ヶ所以上あるとされており、中でもこの浦嶋神社は最も古い記録が残っていることから、一番有力とされている。

ここだけの話。ごく稀な例ですが、実は上記の三通り以外にもウミガメが生きて砂浜に上陸することが知られています。さて、それは一体どんな場合なのでしょう？ ご存じの方は、日本ウミガメ協議会事務局「マリンタートル／ウミガメクイズ係」までハガキかメール (info@umigame.org) で解答をお寄せ下さい。正解された方の中から抽選で素敵なグッズをプレゼントいたします。正解は、次号マリンタートルにて紹介いたします。



浦嶋神社に伝わる玉手箱



..... 第14回日本ウミガメ会議（豊橋）の報告.....

当会が主催する「日本ウミガメ会議」。第14回目となる今回は、2003年11月28日（金）から3日間、愛知県豊橋市で開催されました。今回は海岸工学の分野で世界最高クラスの研究者、ロバート・ディーン博士を招き、今後の日本の海岸管理及び海岸侵食が激しい宮崎と遠州灘海岸表浜の視察報告をして頂きました。



海岸視察（26日）
左から青木伸一さん（豊橋技術科学大学教授）、ロバート・ディーンさん、加藤弘さん（表浜ネットワーク代表）



ヘリコプターで海岸視察を行った。（27日）写真は表浜。

ロバート・ディーン博士（フロリダ大学教授）

マサチューセッツ工科大学で理学博士号を取得後、MIT、ワシントン大学など4つの大学で教壇に立ち、現在、フロリダ大学土木・海岸工学部の教授。地球温暖化による海面上昇の影響評価で必ず参照される数多くの学術的研究や、水面波の基礎理論から海岸保全、海岸環境まで幅広く取り組まれた研究者で、海岸工学分野において世界最高クラスの研究者。

日本のアカウミガメの主要な産卵地である宮崎と表浜の海岸侵食の視察からの提言

（第14回日本ウミガメ会議ロバート・ディーン氏講演要旨より）

まず宮崎と表浜の海岸はコンクリート構造物を設置しても海岸侵食が進んでいる。養浜をしなければ将来必ず砂浜が無くなりウミガメも産卵できなくなる。しかし養浜することで安定した砂浜とウミガメの産卵に適した環境を提供できると考える。そこで、これからの日本の海岸管理に必要な3つのステップを提示する。

- (1) 養浜には大量の砂が必要であり、その砂を得るには特殊な技術が必要とすることから、官民共同でそれらの技術開発等を実施する。
- (2) これまでにない大規模な養浜の実験を最低2箇所実施する。
- (3) それらの養浜実験を行う前後に必ずモニタリングを実施する。

これらのステップに加え、コンクリート構造物と養浜の費用や効果を比較検討したり、実験を行い、その結果を日本や海外のウミガメ会議や海岸工学会で発表し、議論を深め発展させる必要がある。

そしてこれら努力の結果、日本の砂浜が将来にわたってウミガメに適した環境であり続けられることを心より願っています。

今回は、豊橋という交通の便利な土地で行われたこともあり、参加者は300人を超えました。



11月29日（土）表浜海岸視察後、写真撮影を行いました。



初めて漁師さんに参加して頂きました。



これは日本ウミガメ会議が始まって以来のことで、日本のウミガメ屋が古くから望んできたことでした。協議会は高知県室戸市高岡に基地を設け、そこで定置網で混獲されるウミガメの調査を行っていますが、そこでお世話になっている漁師さんの山下傑さんと山下昌司さんが「高知県室戸市高岡定置網におけるウミガメ調査」を発表してくれました。

11月29日
口頭発表をしている山下傑さん。

阿部寧さん☆喜久山晴美さんの結婚式

毎年参加者が楽しみにしているのは、会議2日目夜に開催される懇親会です。この懇親会に参加することが楽しみで毎年会議に参加する方々も多いわけで、今年は、ウミガメが縁で知り合ったお二人の結婚式が開かれました。



一斉にクラッカーを鳴らす参加者



左から菅沼弘行さん、阿部寧さん、喜久山晴美さん

新郎は阿部寧さん(石垣島)新婦は喜久山晴美さん(沖縄島)。急遽牧師役をかっててたのはELNA代表の菅沼氏です。参加者全員からは一斉にクラッカーが鳴らされ祝福されたお二人は、この日を結婚記念日にすると誓いあいました。

発表件数 口頭発表 33件 ポスター発表 28件

今回の講演要旨は、次回うみがめニュースレターに掲載されます。

ウミガメ会議と平行して、市内11の小中学校に講師をお願いした方々

通事太一郎(西表島)、喜久山晴美(沖縄島)、角田真(沖永良部島)、大牟田一美(屋久島)、上辻歌子(鹿児島)、加倉正博(鹿児島)、田中幸記(大月町)、岩本太志(津)、林且雄(津)、黒柳賢治(美浜)、田中真一(横浜)(敬称略)

お手伝いいただいたボランティアの方々

鹿児島大学ウミガメ研究会、三重大学かめつぶり、岡田昌子、小西睦、竹本加奈、寺尾幸、中木めぐみ、中野康浩、中村美貴、成瀬貴、林真由美、山田暢明、藤谷理里、喜久山晴美、上辻歌子、中田史、加藤千枝、松平陽子、尾原早苗、水戸亜由美、堀内千恵子(敬称略)



事務局から

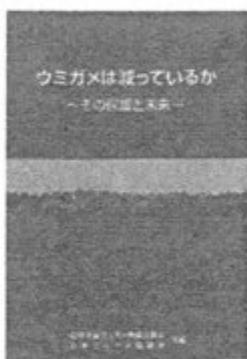
ご寄付をいただいた方々

ご寄付をいただいた下記の方々に厚くお礼申し上げます。

矢原祥介、森本英之、浜田光夫、浅見智子、堺直哉、木村ジョンソン、根間タケ、屋久島観光センター、日本ハム球団西俣・中島、平岡滋豊、リチャード・ゴリス、近藤鉄也、亀崎長生、牧野伸一、松本憲二郎、増永望美、大地昭、藤山純由、明石西ロータリークラブ、中瀬和子、フェリシモ、神楽坂女声合唱団、照本善造、佐藤克文、日高安義、白鳥勲、薄葉純子、京都外大西高等学校、今井裕行、清光編入学院、徳永章二、立川涼、金丸典生、永田安月子、山田輝一（10月末まで、順不同・敬称略）

new!

グッズ・書籍



『ウミガメは減っているか ~その保護と未来~』改訂版

紀伊半島ウミガメ情報交換会・
日本ウミガメ協議会 共編
2000円

ウミガメの教科書です。
お待たせしました、改訂版！



Loggerhead Sea Turtles
Alan B. Bolten (著),
Blair E. Witherington (著)
送料別 6000円
U.S. \$55.00
ハードカバー: 352 p ; サイズ: B5変形判
出版社: Smithsonian Inst Pr ;
ISBN: 1588341364 ; (2003/10)

英語版アカウミガメの教科書です。



『世界民族博物誌』

「月刊みんぱく」編集部 [編]

田主 誠 [版画]

2600円+税

(B6変形版: 323ページ) 八坂書房



オリジナル手拭い

500円 (1枚)

日本で見られる5種のウミガメ。実用性もあり優れたものです。



直径8cm

オリジナルステッカー

会員価格100円(1枚)

山路直樹さんのデザインです。前回よりかなり耐久性に優れています。



掲載された雑誌の紹介

海と自然環境を考えるフリーマガジン

everblue1 団体紹介

everblue2 「日本ウミガメ協議会の目指す浜」

everblue3 「日本とウミガメ」 亀崎直樹 「砂浜とウミガメ」 松沢慶符
エバーブルーのホームページアドレスは、www.ei-publishing.co.jpです。

Coralway 新北風号 Number90 2003 八重山海中公園研究所の紹介

とよはしっ子 東三河のコミュニティーマガジン 8月号

第14回日本ウミガメ会議の案内

Ship & Ocean Newsletter No.62

「ウミガメ保護と今後の浜辺の集落のありかた」



新聞記事紹介

日本ウミガメ協議会が、関わった活動で新聞に掲載された記事をまとめました。この夏は明石市などでアカウミガメ（キララ・ソララ）に発信機をつけて行われた生態調査に関する記事が多かったです。(2003.2.23～12.12 他、全106件)

- | | | |
|----------|-------|----------------------------------|
| 神戸新聞 | 2月24日 | 瀬戸内のウミガメ 放浪のナゾ衛星で追え |
| 琉球新報 | 4月26日 | 「ウミガメ見守って」協力求める看板設置/国頭村宣名真漁港 |
| 神戸新聞 | 5月31日 | 今夏にウミガメ追跡調査 放たれる兄弟 愛称募集 |
| 琉球新報 | 6月11日 | ウミガメの産卵を確認/西表リゾートの浜 |
| 紀伊民報 | 6月21日 | 千里の浜アカウミガメ南部町調査活動、今年も継続 |
| 産経新聞 | 6月23日 | 「海をきれいに」もっと気軽に環境問題を考える |
| 徳島新聞 | 7月4日 | 吉野川河口干潟にアカウミガメ上陸か 点々と残る足跡 |
| 毎日新聞 | 7月6日 | 明石ウミガメが帰る砂浜づくり実行委員会 |
| 毎日新聞 | 7月10日 | 放浪ガメ愛称はキララとソララ |
| 神戸新聞 | 7月12日 | 大阪湾で今シーズン初 アカウミガメ産卵 淡路・成ヶ島 |
| 紀伊民報 | 7月16日 | 千里の浜以外に6海岸も 南部町 アカウミガメ産卵 |
| 神戸新聞 | 7月20日 | ウミガメ「ソララ」きょう大海原へ |
| 茨城新聞 | 8月3日 | アカウミガメ発信機 大洗水族館 生態解明へ追跡調査 |
| 神戸新聞 | 8月5日 | 人工衛星調査のウミガメ死亡 瀬戸内抜けず残念 |
| 徳島新聞 | 8月12日 | 産卵前のウミガメ追跡成功 衛生使い田井の浜から電波確認 |
| 神戸新聞 | 8月20日 | 大海原へ再び 明石のアカウミガメ紀伊水道で放流 |
| 神戸新聞 | 9月8日 | 大阪湾に逆戻り、捕獲 追跡調査のアカウミガメ |
| デイリースポーツ | 9月18日 | チヌ釣りどころじゃない大騒ぎ 行方不明の赤ウミガメ「キララ救出」 |
| 毎日新聞 | 9月30日 | 生態調査中のアカウミガメ「キララ」を再放流へ |
| 東京新聞 | 12月2日 | アカウミガメ、広大な回遊 |



神戸新聞 2003.8.20
大海原へ再び
明石のアカウミガメ紀伊水道で放流



編集 後記

編集担当 矢野由紀

前回初めて編集をさせてもらい、多くの方に感想、アドバイスを頂き大変嬉しく思っています。私は今、この編集後記を屋久島で書いています。そう、アカウミガメのメッカ屋久島です。約1ヶ月、カメではないのですが植物の調査のお手伝いができるチャンスがあり、このマリントラナー編集という仕事と一緒にやって来ました。すっかり、体が美味しい水と空気に馴染んでしまって大阪に帰り、都会の暮らしに戻れるのかな…なんて考えたりもしますが、きっとあっさり元に戻ってしまうのでしょうか。ここに来て毎日、朝陽をみて仕事をし、沈みかける夕陽をみて帰ります。当たり前の様なことだけど、これが本来の生活というものではないかな、と思いました…

実は今、12月12日です。もうすっかり大阪の空気に馴染んでいます。マリントラナー第4号は、ウミガメ会議前に発行する予定でしたが、M氏が原稿をなかなか出してくれなかったのもう冬になってしまいました。そこで、会議の報告も入れて発行することになりました。発行が遅れたこととお詫び申し上げます。今回の表紙は、会員の栗村知里さんに書いて頂きました。栗村さんは、昼間OLをしている傍ら夜はシナリオライターの仕事をされています。次回の発行は、3月末頃を予定しています。次回の原稿、および表紙のイラストを募集しております。事務局までお気軽にご連絡下さい。

マリントラナー（日本ウミガメ協議会機関誌）

第4号

発行日 2003年12月18日
発行所 日本ウミガメ協議会事務局

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
電話：072-864-0335 FAX：072-864-0535
URL：<http://www.umigame.org> E-mail：info@umigame.org